

留学・研究計画書

氏名 西岡 美緒	留学機関名 インドネシア国立芸術大学
留学先国名 インドネシア	留学期間 西暦 2003年 9月 ~ 2005年 8月
研究テーマ (留学目的) インドネシア ジャワ島の民族音楽、ガムランの習得	
研究テーマ (留学目的) の説明	
<p>ガムランはインドネシア、特に首都のあるジャワ島、観光地として有名なバリ島で盛んな民族音楽である。ガムランは、様々な祭りの際や、結婚式や葬式の際に演奏される。また、踊りの伴奏やワヤンと呼ばれる影絵芝居の伴奏としても演奏され、インドネシア人の生活とはまさに切ってもきれない関係にある。</p> <p>私は日本で生まれ育ち、20年間、主にピアノを習ってきたが、<u>大学に入ってからガムランを始めた</u>。きっかけは、もともと民族的なものに惹かれていたこと、ガムランの独特の音色に魅せられたこと、だったが、ガムランを知るにつれ、ピアノとはまた別の魅力を感じ始めた。集団でひとつの曲を作り上げること、音楽が舞踊や影絵芝居などの身体的・視覚的な表現と直接、密接に結びついて発展してきた点は、ピアノとは全く違う側面である。</p> <p>私は現在大阪にあるジャワガムラングループに入っている。私がこのグループに入って面白く感じたのは、様々な職業の人々（学生、大学教授、舞踊家、大工、コンピュータ関連、ピアノ教師など）が集まっており、年齢も上は55歳から下は7歳まで全くバラバラであるということだ。ガムランは、音楽的魅力の他に、コミュニケーション手段として、人の集まる場を作り出す側面を持っている。これには、迫力ある演奏をするには20名ほどの人が必要だということと、打楽器であり、初心者や年少者でも比較的容易に音が出せるというガムランの特徴が大きく関わっていると思う（勿論中には非常に高度な技術を要するものもあるが）。このため、熟練者と初心者が、共に合奏できるのである。また、舞踊や影絵芝居と共に演奏されることも多いため、音楽に興味のある者だけでなく、身体表現や美術に関わる者にとっても魅力的な素材となっている。</p> <p>私はこのガムランの性質ゆえに、ガムランは日本の学校や地域のグループで取り組むのに非常に適しているのではないかと思う。また、西洋音楽以外の音楽に触れることは、日本が明治の西洋音楽輸入期以来、生まれた時から耳にしている西洋音楽や西洋音階を外から見つめなおす良い機会だと思う。</p> <p>私は日本でガムラン奏者として一生ガムランとつきあってゆきたいと感じ、また日本でガムランを広めてゆきたいと感じている。そのため、現地の人々の生活の中で呼吸している音楽を直接体験し、その文化的背景を学びつつ技能を習得したい。</p>	

成果報告書

助成番号

02 - 005

氏名 西岡 美緒

留学先国名
インドネシア機関名
国立芸術大学ジョグジャカルタ校

【研究テーマ】

- ①ジャワ島の民俗音楽、ガムランの習得
- ②ジョグジャカルタ中心部におけるイブイブガムランの過去と現在

【成果報告】

〈留学の目的〉

私は、貴財団から助成を頂き、2003年9月から2005年9月までの2年間、インドネシア国立芸術大学ジョグジャカルタ校に在籍していた。今回の留学の目的は二つ、将来日本でガムラン奏者として活動し、ガムランを広めてゆけるよう、十分な技能と知識を身につけること、また、ジャワの生活の中にガムラン音楽がどのように息づいているのか、直接身を持って体験し、語れるようになること、である。

一つ目の技能と知識の習得については、国立芸術大学のガムラン学科の一年生、二年生のクラスに在籍し、インドネシア人に混ざって合奏経験を積んだ。この大学の授業では主に合奏が中心の内容のため、個人的技能を習得するために、2003年10月から所属大学の教授である Teguh 氏にグンデルとルバップの個人教授を受けた。また、2年目の2005年1月より、Trisni 氏と Bagya 氏のもとで VOKAL を学んだ。

二つ目のテーマに関しては、ジョグジャカルタ中心部の社会において、ガムラン活動はどのような意味を持っているのか、どのような社会的必要性があるのか、を考察する手がかりとして、ジョグジャカルタ内の私設ガムラングループの調査を行い、最終的に、“イブイブガムラン”と呼ばれる、女性だけの特殊な形態のガムラングループに調査の対象を絞った。主な調査内容は、イブイブガムランの発生と歴史的変遷、活動の実態、社会的意義についてである。調査方法は、ガムラングループ Budaya Rini(ブドヨ リニ)への継続的な参加、文献研究、インタビュー調査の3点から行った。

〈イブイブガムランとは〉

ジョグジャカルタ州の中には何百という私設ガムラングループが存在する。成人男性を中心としたババババガムラン、キリスト教会のメンバーによるガムラン、大学のサークル活動としてのガムランなど、その形態は様々だが、中でも最も多いのが成人女性を中心としたイブイブガムランという形態である。“イブ”とはインドネシア語で成人女性を、“ババ”とは成人男性を指す。

インドネシアでは、伝統的に、楽器を弾くのは男性で、女性はプシンデン(ガムランの中 VOKALIST)やプナリ(踊り手)になるというのが普通だった。だが、イブイブガムランにおいては、その常識は覆され、可能な限り全てのパートを女性が担当している。

女性メンバーの方が圧倒的に多い日本でガムランをしてきた私にとって、女性が楽器を演奏するのは珍しいことでも何でもなかったが、ジャワに来てみると状況は大きく異なっていた。まず、ガムラン学科の学生のうち7～8割は男性で、女性は授業では楽器に入るが、公式の演奏会や行事では男性は楽器、女性は自動的にシンデン(VOKAL)に振り分けられる。学校外でも、ワヤン(影絵芝居)やクトプラ(大衆演劇)の伴奏の際に女性が

楽器席に座っている姿を見かけることはまずない。ガムランを生業とするプロ集団の世界ほど、女性はVOKAL, 男性は楽器という図式がきっちりと守られているようである。

一方で、民間のアマチュアガムラングループに目を向けてみれば、数として一番多いのはイブイブガムランのグループなのである。こうしたイブイブガムランは、ガムラン世界における多数派ではあるが、彼女達の活動や能力が高く評価されているとは言い難い。「イブイブガムランは、所詮イブイブガムラン。趣味で、余暇の活動としてやっているだけ」という意見や、指導者からも「彼女達は趣味でやっているだけだから、教えていてもあまり進歩がない。十年以上ガムランをやってきて、いまだに楽譜を手放そうとしないのだから、時々うんざりしてしまう。」といった言葉をよく耳にする。

こうした状況は何故起こったのだろうか。

〈イブイブガムランの過去～発生と増加の経緯〉

第二次世界大戦以前、ガムランの世界は完全な男社会であり、女性の参加はプシンデン(VOKALIST)かプングンデル(グンデル奏者)に限られていた。当時のプシンデンは、歌を売ると同時に時に身体も売る職業だったため、彼女たちの地位は低く見られ、伝統的なジャワ社会で、女性がガムランに参加することはタブーのように思われていた。また、第二次世界大戦以前、ガムランを所有できたのは富裕層や一部の特権階級に限られており、一般大衆にとってガムランは自分たちが所有し演奏できるような身近なものではなかった。1939年～1945年の戦時中にはガムラン活動が殆どできない空白の時代があったが、その後、終戦、独立を経て、徐々にガムランが民間に出回り始める。特に、1960年代以降、ガムランの数もグループの数も飛躍的に増えていった。ガムラン世界に、イブイブガムランという新しい形態のグループが誕生し始めたのも、この頃である。その後1970年代～1980年代に入り、イブイブガムランの総数は増加の一途を辿り、ついにはババババガムランを数で凌ぐほどになった。社会文化学者のスダルソノ氏は、当時の様子をこう語っている。「ジョグジャカルタ TV 局では、毎週金曜日の20:30～21:00にガムラン番組を放映しているが、見てみれば、出演しているのは毎週イブイブガムランのグループである。1988年4月14日の放送を見てみよう。ポヨラリからのグループだが、メンバーは全て女性である。彼女たちの大半はまだ若く、少し歳をとっているのはガンバンを演奏している女性ひとりだけである。メンバーはみな揃いの衣装を身に着けて、髪を結い上げ、優雅に振舞っている。」

1970年～1980年代にかけてイブイブガムランのグループが急速に増加した原因については、いくつかの論がある。スダルソノ氏は、1970～1980年代にかけてジャワ社会の生活レベルが上がり、それまで生活のために必死で働かねばならなかった女性達に、ガムランをする余裕ができたことが一番の原因だと見ている。

また、現在アメリカの大学で教鞭をとっているジョコ・ワルヨ氏によると、都市部では男性は仕事で忙しく、ガムランに割く時間がなかった。また、テレビやラジオに出演することは、当時も今もアマチュアガムラングループにとって大きな喜びであり、花形行事であり、それが直接グループのできる動機にもつながったが、テレビ局もラジオ局も収録を昼間に行っていたため、仕事のある都市部の男性グループは参加できなかったという。

また、スハルト政権時代の政策のひとつに、PKKというものがあつた。Pembinaan Kesejahteraan Keluargaの略称で、政府の指導に基づき、村レベルで女性によって行われる教育・文化活動で、1970年代にジャワ中に広まった。PKKの一番大きな目的は、政府による家族計画を広めることだったが、文化活動として最も好まれた

のはガムランだった。その他にも、裁縫や料理教室、アリスン(コミュニティ内で、低金利で金を貸し借りしたり、金を出し合ってコミュニティの活動に充てる制度)など、PKKの活動は多岐に渡っている。同様の集団に、公務員や公務員の妻によるダルマ・ワニタという組織もある。PKKやダルマ・ワニタは任意の組織だが、当時ある種の強制力を持っており、入らなければ居心地が悪いという雰囲気だったという。何はともあれ 1970 年代、1980 年代に結成されたPKKやダルマ・ワニタのイブイブガムラングループは多く、当時創造的な活動として一定の評価を受けていた。今でも活動を続けているグループも少なくない。

以上のようないくつかの要因により、1970～1980 年代、ジャワ島中部のイブイブにとって、ガムランという文化活動は生活に非常に適したものだだったと推測される。

〈イブイブガムランの現在〉

ここでは、イブイブガムランの現在の活動の実態を知る為に行った観察とアンケート調査のまとめを行う。

今回観察・アンケート調査を行った私設ガムラングループは、10 グループである。うちメンバーが完全に女性のみグループは 6 グループ、男性女性混合のグループは 4 グループである。

全体的に言えることは、年齢層が総じて高く、男性も女性も最も多いのは 40 代～60 代であった。10 グループすべて指導者は男性であり、一部を除いて、習得の難しい前楽器(ルバップ、クندان、グンデル)は空きの状態になっているか、指導者の男性が演奏している。運営費用は会費制であり、メンバーはそれぞれひと月平均 5,000 ルピア前後の会費を支払うが、収入に余裕のあるメンバーは自主的にそれより多く、10,000～20,000 ルピア払うのが通例である。この会費の中から、指導者への謝礼や維持費が支払われるが、行事の際には、難易度が高いため空きになっている楽器に人を雇ったり、衣装をそろえたり、指導者に謝礼をするのに、その都度必要経費を集める。指導者への月々の謝礼は、全くなし～150,000 ルピアと様々だが、50,000 ルピア前後のグループが最も多い。私が留学していた 2003～2005 年、普通の食堂で一回食事をすると 5,000 ルピア前後だったから、平均 50,000 ルピアというこの金額は決して高くはなく、教える方としてはお金になるという程の金額ではない。イブイブ・バババガムランの活動は、指導者にとって収入源としては捉えられていないようだ。

これら多くのグループで活動の目玉となっているのが、RRI(国営ラジオ局)での収録と、王宮(クラトン)の舞台での演奏である。RRI では週に2回、民間からガムラングループを募って収録・放送を行っている。希望グループは RRI に登録しておけば順番に出番が回ってくる仕組みである。現在ジョグジャカルタ州全体で 56 グループが登録されている。王宮での民間ガムラングループの演奏は 1989 年から始まったが、こちらも登録制で、現在 53 グループが登録されている。その他の活動としては、8 月 17 日の独立記念日、結婚式、イスラム教の男性の成人儀式など、村の祝い事の際にガムランが演奏されてきたが、これらの行事は、村の人々の入れ替わりや世代交代で年々減少傾向にある。また、地域対抗で行われるイブイブガムランコンクールも、イブイブガムランの活動の活性化に大きな役割を果たしていたが、近年は主催者である市や州の財政難のため減少傾向にある。

〈ブドヨ・リニ メンバーへのインタビュー調査から〉

ブドヨ・リニはジョグジャカルタ市とスレマン市の境目に位置するイブイブガムランのグループである。前身から数えれば20年以上の歴史を持ち、優秀な指導者に恵まれてきたためグループのレベルも比較的高く、名の知れたグループである。週に一度練習を行い、活発に活動している。このグループに2004年10月～2005年9月にかけて約1年間在籍し、活動に参加すると共に、イブイブ達が自分たちのガムラン活動をどう捉えているのか、また、それぞれの人生の中でどう位置づけているのか、聞き取りを行った。以下はその一部を抜粋する。

Aさん(ブドヨ・リニ代表 50歳 担当楽器:クندان)

～ガムランとの関わり～

Aさんがブドヨ・リニに入ったのは1986年のことである。当時地元でイブイブガムランコンクールが開催された折、コンクールではすべての楽器に女性が入らなければならなかったため、当時のブドヨ・リニの指導者であるジョコ氏にクندان奏者としてグループに入るよう誘われた。ジョコ氏はガムラン学科の教授で、自宅に青銅製の質の良い楽器とグループを持っており、コンクールなどの際に優秀な奏者を見かけると自分のグループに来るように誘っていた。そんな経緯もあり、結成当時のブドヨ・リニは優秀なプシンデンと奏者が数人集まっていた。

Aさんは父親がダラン(影絵芝居の人形遣い 人形を操りながらガムラン隊に指示を出し、物語を進めてゆく)で、小さい頃からガムランに親しみ、簡単なクندانは叩けたが、正式に身を入れ始めたのはブドヨ・リニに参加し始めてからである。難しく責任の重いパートのため何度も挫折しかけたが、「無理っていったって、他にできる人がいないんだから、やらねば。」と言われ、泣く泣く頑張っているうちに結局できるようになった。3年間ジョコ氏と学んだ後、ジョコ氏はアメリカに旅立ち、ブドヨ・リニの指導者は現在のスニョト氏に交代した。15年経つうちにメンバーの入れ替わりがあり、今残っている結成当時のメンバーは3～4人である。

現在は、グループの代表として、結婚式など活動の場を探したり、来なくなったメンバーにこまめに声をかけてみたりしている。「グループを存続させるには、常に働きかけが必要。メンバーとはもう長いつきあいなので、家族か親戚のような感覚になっている。」という。

～女性とガムラン～

ジャワ社会では伝統的に、女性は夜に出歩いてはいけない、家にいなければいけない、という考え方があった。1955年生まれのAさんの時代には、すでにそのような考え方は緩くなってきていたが、Aさんの母親の時代にはまだそのような考え方が支配的だった。ババババガムランの練習は普通夜にあるので、家にガムランでもない限り普通は女性は参加しなかった。今でも、人によっては、妻がガムランをする＝頻繁に家を留守にすることになる、という理由から、妻にガムラン活動を禁ずる夫もいる。

～ワヤン(影絵芝居)の伴奏に女性がいない理由について～

ワヤン用の曲は難しく、いっぱい覚えられないから、できる人がいない。だから参加しない。でも本当は、女性もワヤン用の練習と一緒に参加すれば出来るようになる筈。ワヤンの楽団というものは、普通ダランが率いるものだけれど、ダランは女の人のことをあまり信用していない。女にガムランができるとは思っていない。

Bさん(57歳 担当楽器:ボーカル)

～ガムランとの関わり～

ブドヨ・リニには参加し始めて2ヶ月。ガムランは好きだし前からやってみたいとは思っていたけど、どこで何曜日にやっているのか知らなかったし、仕事で忙しかった。仕事は高校の化学の教師。今はちょうど定年退職になって時間もできたし、子供3人も成人して家を出たので余裕があるところへ、友人から誘われたので入った。

自分の周りでガムランのできる人は殆どいない。皆貧乏だから、日々のお金を稼ぐのに忙しくて、趣味は後回しになっている。

Cさん(48歳 担当楽器:ボーカル・サロン・クノン)

ガムラン歴14年。自分は田舎で育ったから、芸術活動といえばガムランだった。家族にガムランを弾ける人はいないけど、夫は理解してくれていて、練習やコンサートの際にはよく送り迎えをしてくれる。仕事は以前パン屋で働いていたが、今は主婦をしている。村の集会在り、けっこう忙しい。今月だけを見ても毎週金曜の町内清掃の他に6回は会議やアリサンの話し合いがあり、それらに出席するのは女性の仕事である。

〈まとめ〉

イブイブガムランという形態は1960年代に発生し、1970～1980年代にかけて中部ジャワ全体で飛躍的に増加した。イブイブガムランは各地で演奏活動を行い、それがTVやラジオで放送された。当時のイブイブ達にウーマンリブ的な発想はなかったものの、結果的に、女性がガムランを演奏することに対して、タブーという意識から誇るべき行為へと意識の変革が起こった。また、女性と男性の混じりあうことの少ないジャワ社会において、イブイブガムランという器ができたことで、ガムランに参加してみたい女性、ガムラン的バックグラウンドを持たないが0からガムランを始めてみたい女性たちの受け皿ができ、伝統ジャワ音楽を愛し、自らジャワ音楽に関わる力強い層を作り上げた。

しかしその一方で、“イブイブガムラン”の地位の固定化も起こった。“イブイブガムラン”といえば素人が片手間にやるもので、所詮余暇活動の域を出ない、という評価が定着し、能力・ジャンルを限定されて、そこから出られない、また、イブイブ自身も出たいと思わない状況が続いている。

イブイブガムランという形態は、1970年～1980年代の女性の生活に適した形で発展し、この30年余りその活動内容や練習形態は殆ど変化していない。結果、若者や子供がガムランを始める場にはならず、ガムラン世界全体に云えることだが、イブイブガムランの世界にもまた高齢化が起こっている。現在ジャワの民間ガムラン活動を担っている一番大きな層がイブイブガムランであるが、彼女たちの年齢は40歳～60歳が最も多く、丁度1970年代～1980年代に20～30代だった世代である。

ジョグジャカルタの街は今建設ラッシュを迎えている。コンビニエンスストアや大型ショッピングモールが次々に建設され、人々の生活や価値観も様々に変わりつつある。このジョグジャカルタの中で、今後イブイブガムランに代わる新たな形態が生まれるのか、どういった層が民間ガムラン活動を担っていくことになるのか、息を呑んで見守っている状態である。



結婚式の演奏前 待ち時間のイブイブ



花嫁の父親と母親



演奏隊



練習風景